国際シンポジウム／ワークショップ

開会の辞

イルワンディ・ユスフ（アチェ州知事）〈代理〉

Irwandi Yusuf (Gubernur Aceh) [Pengganti]

ご出席のみなさま、とりわけ京都大学地域研究統合情報センターからいらっしゃった林行夫先生、柳澤雅之先生、山本博之先生、そのほか日本からいらっしゃったみなさま、また津波防災研究センターのディルハムシャー先生、そのほかのご出席のみなさま、本日はようこそおいでくださいました。あらためまして、州知事よりみなさまのご来場を歓迎いたします。

現在日本は、まさに東日本大震災からの復興の途上にあると聞いています。このシンポジウムがアチェの今後の発展さらには日本の復興に役立つ成果を挙げることを期待しています。

アチェでは2004年12月26日に大きな地震と津波がありました。そして日本では2011年3月11日に大きな地震と津波がありました。これらのことは、アチェと日本が災害対応の経験を共有する機会となりました。このワークショップを通じて、新しい関係が日本とインドネシア、とくに日本とアチェのあいだに開かれ、ともに災害に対応する力を高めていければと考えています。

災害が起こったときに失われるものの一つが情報です。また、復興の過程においても情報が重要になります。新たな状況に対応するための情報や、新たな状況そのものを示すさまざまな情報があります。復興過程では、これらの情報は、復興に適切なかたちで、そして短い時間のあいだに処理していかなければなりません。こうした課題にどう対応するのか、またそれらの多様な情報をどのように保存し活用するのかが課題であると思います。

復興においては、政治学、経済学、防災学、そしてもちろん地域研究も含めた多様な分野にわたる学術研究の成果を、人びとが実際に使えるかたちにすることも重要です。州政府は、学術研究と人びとを結ぶ橋渡し役としてシアクアラ大学津波防災研究センターがあると考えています。ワークショップを通じて、地域の発展、国民の発展に役立つ人材、とりわけ災害対応の分野で貢献する人材づくりがされることを期待しています。

また、そのような橋渡しの成果の一つとして、今回のシンポジウムを通じて紹介される津波モバイル博物館があると考えています。情報技術はそれだけでは役に立ちません。それを使おうとする人びとの意思、そして必要な情報をそれぞれの人びとや機関が提供することが必要です。人びとの協力と活用の意思をもってすれば、情報技術を通じてアチェの経験が世界に発信され、それを通じて世界のさまざまな国にとってアチェがモデルを提示することが可能になるだろうと考えています。

このシンポジウムを通じて、京都大学地域研究統合情報センター、シアクアラ大学津波防災研究センター、そしてアチェ州内外の関係する諸機関が力を合わせて、アチェで、またインドネシアで、とりわけ災害対応の分野において、人びとが求める課題を克服し、さらに発展へと進めるための成果が得られることを期待しています。

ここに、アチェ州知事イルワンディ・ユスフとして、本シンポジウム・ワークショップの開催を宣言いたします。